

動きの変容に注目した器械運動の実践

—中学1年生マット運動の実践より—

教科指導重点コース 造形・創造科学系（保健体育）

氏名：谷口 泰史

1. 問題と目的

令和3年より中学校では、学習指導要領(平成29年) (以下「指導要領」)が全面実施となった。指導要領の改訂に伴い、保健体育科の目標が「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成すること」¹⁾となった。そのためには、課題の発見と合理的な解決を遂行するための体育が必要である。

また、これからの教員に求められる資質能力には、「新たな学びを展開できる実践的指導力(基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力)」²⁾とある。そのためには、生徒が自ら課題を発見し解決するために教師は主体性を保つ環境を整えるなどして授業づくりをしなければならないと考える。

現状では、運動をする子供とそうでない子供の二極化傾向が見られ、運動をしない子供にとっては、体育科の目標実現が困難である。例えば、器械運動では、「できる」、「できない」がはっきりした運動であることとある³⁾。これは小学生に限らず中学生でも同様であるとする教師は少なくない。

また、「より雄大で美しい動きができるようになったりする楽しさや喜びも味わうことができる」とも、「指導要領」にも記載されている。そのため、器械運動に関して、「できる」か「できないか」の2点で捉える評価観を持ち、「美しい動き」から「きれい」に行うことが重要であるとする教師も少なくない。そのため、「美しい動き」ができるようにすることが

目的となり、技の技能ポイントを図示するだけの授業がしばしば見られる。その授業では図示された通りの動きを求められ、欠点の修正も求められる。そのため、図の技能ポイントを基準とする「できる」か「できないか」の2観点しか持ち合わせなくなるのではないかと考える。

以上のような観点から考えた場合、体育科では、「できる・できない」の2観点で捉える指導観を問題とした。

ここでいう標準的な体育授業を確認する。高橋は、体育授業場面における教師の指導行動などをいくつかの視点から観察分析する中で、よい体育授業の条件を構造的に書き出した。それによると授業の内容的条件には「目標・内容・教材・方法の計画と実行」⁴⁾があると示している。そのためによい体育授業とは、授業の教材・方法などの計画が遂行されたとは限らず、目標が達成されることと筆者は考える。

次に、マット運動の標準的な授業構想について確認する。表1は文部科学省による器械運動の手引きである(マット運動:1~8時間、跳び箱:9~15)。目標は、「基本的な技を繰り返し行う中で合理的な動き方のポイントを見付け、技能を確実に習得すること」⁵⁾を目指している。内容は、学習状況確認・基本的な技の練習・新たな動きの学習・発表会となっている。教材の詳細は明記されていない。方法に関しては、それぞれの「技能ポイントの確認」として、明記されている。また、「合理的な動き方のポイントを見付ける」とあるが、「技能ポイントの確認」と明記されていることから、生徒が発見した合理的な動きではない。このように「できる」か「できないか」の2点で捉える実践⁶⁾⁻¹¹⁾は多くの学校で行われていると考える。

指導要領には、「技の出来映えの質的变化を含めた

【表1 中学校保健体育の器械運動の手引き】

		1	2・9	3・10	4・11	5・12	6・13	7・14	8・15
第1学年	指導内容	基本的な技を滑らかにを行うための技能				条件を変える、発展技を行う技能			
		健康安全に気を配る・学習活動上の役割				積極的な学習への取組			
		特性成り立ち		技の名称や行い方					
	技の合理的な動きのポイントを見付ける・練習場面での安全対策								
学習の流れ	オリエンテーション 学習状況確認	基本となる易しい動き 基本的な技の確認	＜マット＞回転の仕方、着手の仕方、起き上がり方 ＜跳び箱＞踏み切り方、着手の仕方、着地の仕方			新たな動きの学習 課題に応じた練習など 技の組合せ方		発表会 技能の高まり確認 よい演技を認める	

指導内容」¹²⁾ とあるため、教師が生徒の変容過程を捉えることができる授業であれば、内容・方法を精査でき目標への達成がより実現できるのではないかと考える。

そこで本研究では、体育授業を通して出現した動きの変容に注目し、それらの事例を多観点で検討することを目的とする。

2. 研究実践

2-1. 実践対象・実施期間

弥富市立 A 中学校の 1 学年 5 クラス 164 名を対象とした。

実施期間は 2022 年 9 月 10 月とし、「器械運動」マット運動の単元（6 時間）を行った。

2-2. 単元計画と単元目標

表 2 は単元計画である。場の設定では図 1 のようにマットを 5 枚並べて行った。

本実践では、自己に適した技で演技をするために、第 2 時から第 5 時にて、演技構成などの課題を発見する時間とした。

接点技群一斉指導では、表 3 の内容をマット 2 周分行った。

演技構成では、着手などの条件を変えた技を行い、滑らかに行えるように自己に適した技で演技ができるように考える。

グループ内発表は、演技構成を考え練習したことをグループ内で発表する。グループ内で改善点を話し合い、自分だけでなく他者の課題をも発見する時間である。

発表会とは、考えた演技内容を 1 人ずつ行う。評価は「出来栄」と「難易度」である。

自由時間とは、自身の発表を終えた後に自身が行いたい技などを行う時間とした。

学習プリント（図 2）は第 1 時に配布し、毎時の授業終盤で記入するように指示した。

演技構成プリント（図 3）は練習の時間に記入し、毎時間回収した。場については、安全にできるようにと伝えた。

単元目標は、「自己の課題を試行錯誤し、自らの学

習を調整しながら学ぼうとすること」とした。



【 図 1 授業場 】

NO.	日時	フリーコメント（考えたこと・気づいたこと）	次回、試みたいこと
1			
2			
3			
4			
5			
6			

～繰り返し～

【 図 2 学習プリント 】

1 年 組 番 名前 _____

・技の発表計画を書こう。

PART1 □ ⇒ □ ⇒ □ ⇒ □ ⇒ □

PART2 □ ⇒ □ ⇒ □ ⇒ □ ⇒ □

できたポイント（何がよかったか）

できなかったこと（どうすればいいかも書く）

【 図 3 演技構成プリント 】

【 表 2 単元計画 】

時数	第 1 時	第 2 時～第 4 時	第 5 時	第 6 時
学習活動	オリエンテーション 学習の進め方 接転技群一斉指導	演技構成 練習	グループ発表 練習	発表会 自由時間
まとめ				

【 表3 接点技群一斉指導の内容 】

NO.	運動課題
1	でんぐり返り（前転がり）
2	前転
3	グーで前転（拳手のひら側）
4	グーで前転（拳）
5	グーで前転（拳を縦に）
6	手首で前転
7	遠目に前転
8	前転から片脚で立つ
9	2人で手をつないで前転
10	3人で手をつないで前転

2-3. 単元の趣旨

指導要領では「基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを組み合わせること」¹³⁾が技能の内容となっており、「難易度の高い技のみに興味をもつのではなく、基本的な技の出来映えを高めることも大切である」¹⁴⁾とある。

本実践は、生徒が自ら課題を発見・解決できるようにするため、自己に適した技で発表を行うこととした。基本的な技は小学校第5学年及び第6学年で学習される技を含んでいるため、第1時を除いて、教師による細かい技能ポイントの解説などを行わずに実施した。

第1時では、生徒に条件を変えた技について理解させるために、開始姿勢・手の着き方・終末姿勢を変えて行えるように、表3の内容を行った。

本実践では、基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを組み合わせることで演技ができるようになることを目指すこととした。

2-4. 授業展開

授業は、図1のように場を準備し、表2の単元計画に沿って行った。第1時では表3に示した運動課題を行い、毎時授業の終盤のまとめの時間に学習プリント（図2）に記入させた。第2時から第5時までは生徒が実技書（副読本）などを参考に技の組み合わせを考え、演技構成プリント（図3）に記入し、第5時にはグループ内発表会、第6時に学級での発表会を

行った。

2-5. 分析方法

A) 授業中の動画

生徒の動きの変容を把握するために動画撮影を行った。撮影は5クラス164名を対象とし、これを分析した。撮影する方向は、演技する方向に対して横から撮った。

B) 学習プリントの記述

生徒の学びの状況を把握するためにフリーコメントにて「考えたこと・気づいたこと・試したいこと」の記述を収集し、これを分析の対象とした。

学習プリントは、毎時の授業終盤で記述させ、回収した。記述への指導としては「自由に書いてください」と強調した。

C) 演技構成プリントの記述

生徒がどのような演技構成を考えているか把握するために演技構成プリントにて演技構成と発表後「できたポイント・できなかったこと」の記述を収集し、分析の対象とした。

演技構成プリントは、授業中自身の状況に照らし合わせて記述させ、授業後回収した。記述への指導としては「条件を変えて良いので、技がつながるように構成を考えてください」と伝えた。

以上、授業中の動画による動きの変容とプリントの記述（以下、学習プリントをフリーコメント、演技構成をコメントとする）から、授業中の「動きの変容」に注目し分析を行う。

3. 結果と考察

3-1. 前転の動きの変容



【 図4 回転不足な前転（生徒A） 】

「前転」は、マットを蹴ることによって起動し両手でマットを抑えることで首への負担を緩和させる。へそを見るように顎を引き、腹をしめることによって体を球体のように固め、背中を着いて回転する運動である。

図4で、Aは頭頂部を着いて回り始めている。そのため、球体のように背中を丸めることができず、滑らかに転がることができている。その結果、回転の途

中で左方向に体勢が崩れている。



【 図5 斜め回転 (生徒A) 】

図5では、Aは斜めに回転している。周りの生徒から「勢いをつけたらできる」と言われたため回転の開始時には図4の開始時よりもキックを強くし前に着手している。その後、腰角度を収縮させて回転を加速させているのではないかと考える。勢いをつけた回転の開始時には両手をマットに着いているが、左手から肘にかけてマットに着いた状態になっている。勢いをつけたことで、頭と首に負荷がかかると考え、怖がっているのではと推察する。そのため、左側に体を倒して首への負荷を逃していると考えられる。



【 図6 第4時の様子 (生徒A) 】

図6は膝を着いた姿勢から前転をしている生徒である。膝を着くことで初動が弱く、勢いがなく滑らかに転がることができていない。

図5では斜めに方向に回転するのは恐怖心から負荷を逃していると考えたが、図6では勢いを抑えることによって両手でマットを抑えることで首への負担を緩和させ前転が行えている。また、3枚目では顎を引き、腹をしめ球体のように固めている。勢いをつけないことで恐怖心を取り除くことができたかと推察する。



【 図7 脚を持ち前転 (生徒B) 】

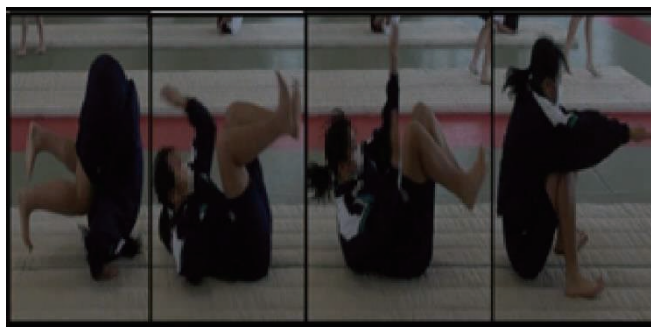
図7は脚を持ち回転加速を高めている生徒である。

2から4枚目にかけて股関節屈曲角度の変化が生じている。腹部と大腿部に空間を1度広げることによって回転が減速してしまうが、同時に脚を引き寄せ膝関節を屈曲させることで減速した回転を再び加速していると推測する。

そのため、背中がマットから離れた状態で顎を引くことなく終末局面まで迎えることができていると考えられる。



【 図8 第1時の様子 (生徒C) 】



【 図9 第5時の様子 (生徒C) 】

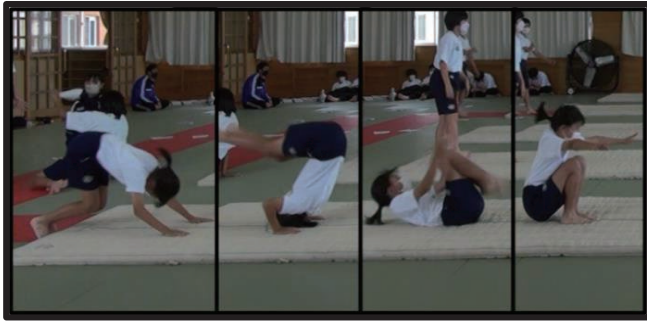
図8は膝を着けた姿勢でないと回れず尻もちをつく生徒である。開始姿勢が膝を着けた状態から前転を行っているため、踏切る動作がない。また、腰角度が狭いため、回転加速局面を作り出すことができず立ち上がることができないと推察する。

図9の第5時の様子では、開始姿勢が立った状態から行われた。膝を着かずに回れるようになったことで踏切る動作が現れ、腰角度が図8よりもやや広くなった。

そのため、回転加速が高まり、終末局面までスムーズに行えるようになったと考える。



【 図10 第1時の様子 (生徒D) 】



【 図11 第6時の様子 (生徒D) 】

図10の第1時では、背中を球体のように固めることができず、腰を打ち付け回転を止め結果的に起き上がれない状況である。第1時のフリーコメントには、

前転を回るときはちゃんと頭をしまって回るのが

と記述している。このコメントから第2時以降は「顎を引いて回転すること」を課題として学習に取り組んでいると推測される。

図11では、踏切が回転の起動となり、頭越え時の腰角度が図10と比較すると大きく広がっていることと膝を屈伸することによって得る回転加速局面を作り出したことで、より大きな回転加速が得られたと考える。また、図11の3枚目では、顎を引いて回転しており自身の学習課題を解決する姿が見られた。結果的に、Dは前転が滑らかに行えるようになった。

3-2. 後転の動きの変容



【 図12 座から肩越し後ろ回り (生徒A) 】



【 図13 座から肩越し後転 (生徒E) 】

「後転」は、しゃがんだ姿勢から体を丸めながら後頭部—背中—尻—足裏の順にマットに接して腰を上げながら後方に回転し、両手で押して立ち上がる¹⁵⁾運動である。

図12は図4・5と同時間に撮影したものであるため、前転と同様、首に負荷がかかることを怖がっていると考察する。そのため、図12でも左方向に体勢を崩している。

図13は頭越え局面で肘を着き膝着地している生徒である。腰をマットに着けた局面と2枚目の足の上体への引き寄せ局面では胸と大腿の間の空間の変化が少ない。そのため、回転加速が得られないと考える。



【 図14 第1時の様子 (生徒F) 】



【 図15 第6時の様子 (生徒F) 】

図14の第1時の様子では、図13で考察した内容と同様であると考えられる。異なる特徴は、頭越えの局面で着手が崩れていないことと、膝の位置が低いことである。

図15の第6時の様子では腰をマットに着いている1枚目と2枚目の足を上体へ引き寄せている局面の腹部と大腿部との空間が狭くなっている。そのため、回転加速を得たと考えられる。また、2枚目の写真を比較すると足の位置は高くなり、背中がマットに接地している時間が減っていると考えられる。

3枚目では膝の角度が広がっていることで足の位置が低くなり、終末局面が崩れずに行えている。どの局面においても回転が加速されていると考えられる。

3-3. 倒立前転の動きの変容



【 図16 第2時の様子 (生徒G) 】



【 図17 第6時の様子（生徒G） 】

倒立前転は、正面前向きで脚を振り上げ、倒立を経過して背面側へ回転する運動である。倒立前転について、西沢は「倒立静止してから前転を行う」¹⁶⁾、金子は「倒立から前転を行う」¹⁷⁾ などのように説明されている。そのため、倒立経過は倒立静止を含むのか含まないのか学習者の理解は曖昧である。木下は「倒立で一定時間静止してから前方への転がりにもち込むことが、倒立前転の独自性を示すことには直結しない。この場合は単独技としての倒立静止の成立を示していることになる。複合技としての倒立前転を特徴づけるのは、倒立姿勢から前方への転がりへもち込む経過を中核とする全体としてのまとまりである。」¹⁸⁾ と述べている。

図16の第2時の様子では、Gは脚を振り上げた後、膝を曲げたまま倒立姿勢に入り、不完全な状態から回転を始めている。そのため、勢いを抑制できずに頭頂部を先に接地し前転をしている。

図17はGが発表をしている様子である。ここでは振り上げた後の膝が図16よりは伸びている。また、頭の位置がやや背面頭位¹⁹⁾への兆しが見られる。前より倒立姿勢が大きくなり、肩を前に出すようになった。そのため、後頭部から設置した前転に移るようになった。そのため、回転が前より滑らかになり倒立前転の習熟が伺える。

3-4. 頭倒立の変容



【図18 段を使って頭倒立をする生徒】

「頭倒立」とは、頭と両手で三角形をつくるように、両手を肩幅くらいに着き、頭を三角形の頂点になるようについて、腰の位置を倒立に近付けるように上げながら両足をゆっくりと上に伸ばし逆さの姿勢に

なる運動である²⁰⁾。

図18は跳び箱を使用して頭倒立をしている生徒の様子である。はじめは、マット上で行っていたが足が上がりずいた。生徒から「足が上がらないから上げた状態からやりたい」との意見をきっかけに跳び箱を設置した。

跳び箱を使用した生徒のフリーコメントには、

跳び箱でやるとちょっとできた感じで、ないと

頭倒立をするときに、両手と頭を正三角形みたいな位置においてすることで安定することに気づき

との記述があった。跳び箱を使用していない生徒のフリーコメントには頭倒立についての記述は「できた」「できなかった」が多く見られた。それは、跳び箱の段を利用することで倒立姿勢までの振り上げ幅が短くなったと考える。

逆に跳び箱の段差を利用しなければ、強い振り上げを要し、不安定な倒立になり失敗する可能性が高まるものとする。

3-5. 首はね起きの変容



【図19 ゆりかごから首はね起きをする生徒】



【図20 首はね起きをする生徒】

「首はね起き」とは、前転を行うように回転し、両肩-背中がマットについたら腕と腰を伸ばし、体を反らせながらはね起きる運動である¹⁵⁾。

図19・20の生徒たちは演技発表を終え、自由時間に首はね起きに取り組んでいる様子である。

図19では、ゆりかごの動作から跳ねるタイミングを模索している。初めは腰を浮かせ膝を屈伸させることで加速局面を作り出そうとしていた。手はゆりかごの動作のままマットに着かず腰の横に位置していたが、首はね起きを試行回数が増えるごとに、徐々に浮かせる位置が頭部に近づき自然に頭部の横に着手するように変化した。

図20は、手でマットを押し放す動作を他の生徒がしたことで、他の生徒もマットを押し放している様子である。浮かせる位置が頭部まで近づいたが、首はね起きができることはなかった。

ほん転技群を2種類の運動要素で見た場合、はね動作では瞬発的な腰の屈伸と投げ出す前に回転が一瞬止まる「ため(切り返し)」が必要¹⁹⁾である。どちらの運動要素も瞬間的なことである。また、段差のないマット上では、腰の屈伸をするために体を浮かせてもすぐに足が床についてしまう。そのため、一定の高さで変化がないため回転を止めるタイミングがつかめず、2種類の運動要素を発見することが難しい。

生徒にとって、自身の運動課題を理解することができず、結果として、生徒は首はね起きができなかったと考察する。

3-6. 前方倒立回転跳びでの動きの変容



【 図21 第6時の様子(生徒H) 】



【 図22 第6時の様子(生徒H) 】



【 図23 第6時の様子(生徒H) 】

図21は発表時の様子である。Hは頭はねおきを行っているつもりであるが、首はねおきになっている。また、発表後のHのコメントには、

頭はねおきが前転になってしまった。

と記述している。Hは頭はね起きや首はね起きなど技の名称を理解していない。また、その他の生徒も側方倒立回転や前方倒立回転跳びなどの名称を理解していない生徒が見受けられた。

Hは首はね起きができなかったことへのコメントには、

足を空に向けて蹴るようにすれば成功できるかも

との記述があった。

Hは、金子が首はね起きに必要な技術として挙げている要因の1つである「足のはね上げによるエネルギーギッシュなはね動作」¹⁷⁾を示唆していると推察する。

図22・23は演技発表を終え、自由に練習している様子である。

図22では、助走とホップを行わずに試技していた。また、開始時の腰角度が狭くなり、勢いがつかず振り上げ脚の位置が低くなったと考える。

着手局面では肘が曲がることで図21と同様にタメを作っていると考え。勢いが失われたことで空中局面での腰の位置が低くなり着地が困難になっている。

図23では、助走とホップによって腰角度が広く、振り上げ脚の位置が高くなっていることから、回転が加速していることがわかる。

着手局面では図22よりも肘が伸びていることから、空中局面では腰が高い位置まで持ち上げることができた。

そのため、前よりも足のはね上げに勢いがつき前方倒立回転跳びの習熟が伺える。



【図 24 第4時の様子 (生徒 I)】



【図 25 第6時の様子 (生徒 I)】

図 24 は、第 4 時の様子である。I はホップによる加速と膝角度の変化による加速によって行われている。突き出し時に脚が前後に開いているため、着地が困難であったと考える。I のフリーコメントには、

前方倒立回転跳びを挑戦してみて、勢いはあったけど、手のプッシュみたいなやつはできなかった

と記述にあった。

I は突き出し時に片手ずつマットから離れているため、「手のプッシュができなかった」と記述していると考えられる。そのため、第 5 時以降は「倒立時にプッシュ（突き出し）を同時にすること」を課題として学習に取り組んでいると推察する。

図 25 では、図 24 と比較するとホップ・着手局面・空中局面・着地に変化が現れた。

ホップでは、腰角度が広く着手時までの回転加速が得られるようになった。

着手局面では、振り上げ脚の位置の高さと肩関節の角度が広がっていることから、回転が加速していることがわかる。また、突き出しの手はほぼ同時に離れている。突き出しのタイミングに関しては、図 25 は図 24 よりも、マットに対してやや垂直の位置で行っている。そのため、空中局面では、高い位置まで腰が上がり、膝を屈伸させて回転力を高める終末局面を迎える場合でも、着地が安定するようになったと考察する。

I の動きの変容から、前方倒立回転跳びが習熟するにつれて、倒立に近い姿勢で着手と突き手を行っている。そのため、着手から突き出しまでの時間が短くなり前方倒立回転跳びの習熟が伺える。

3-7. その他の出現した動き



【図 26 演技構成を考える (生徒 J・K)】

図 26 では、演技構成を考えるために実技書（副読本）を眺めている様子である。

発表会での評価は「出来栄えと難易度に注目して行う」と伝えた。

生徒 J・K のフリーコメントには、

技の構成を考えることは難しいとわかりました。
つながるように考えるのは頭を使うし、自分がで

自分ができる技をアクティブでよく見て、練習す

と記述している。その後、演技構成を考えるために実技書を眺め一度も試技することはなかった。

多くの生徒が「出来栄え」を重点的に捉え、できる技で演技を行うことを考えたため、試技する必要がなくなったと推測される。

生徒 J・K は、その後の授業では、全員で行う準備運動やグループ発表を行うだけで、その他の時間での試技は見られなかった。「発表会」や「出来栄え」「難易度」の評価によって生徒の関心事を変容させていると考える。K の 1・2 時間目の「次回、試したいこと」へのフリーコメントでは、

まっすぐに回れるようにしたり、回った後に片足で立てるようにしたい。

と記述しており、技の「出来映え」を高める他に、自

身にとって「難易度」の高い技への関心が高まったと推察する。

その後、第4時と第5時のフリーコメントでは、

グループ発表で自分ができる技を頑張ってやりた
い。

と記述している。授業の様子とフリーコメントからKへの関心事が変容したと考える。他の生徒のフリーコメントにも、
との記述が見られ、J・K以外の生徒にも同様な変容があったと考える。

前方倒立回転跳びをもっと練習したい、他の難し
そうな技もやってみたいけど、演技でやる技を優
先して練習したい。

4. まとめ

本研究は、体育科では、「できる・できない」の2観点で捉える指導観を問題とした。これについて、体育授業を通して出現した動きの変容に注目し、それらの事例を多観点で検討することを目的とした。

本実践では、文部科学省による器械運動の手引きなどの資料に準拠した「器械運動」(マット運動)の授業を中学1年生5クラス(164名)の学級で6時間行った。この状況を検討するために、動画による動きの変容とプリントの記述を対象に分析した。

実践の中から、前転・後転・倒立前転・頭倒立・首はね起き・前方倒立回転跳びなど生徒が取り組んだ技の形態・リズムの変容に着目した。その結果、習熟の特徴を見出した。また、プリントからは、技能ポイントなど自己の課題を発見する記述が見られた。他には、「またやりたい」「他の技にも挑戦したい」などの記述があり、興味関心が高まった学習になったと考えられる。その一方で、「自分ができる技だけでしか作れない」「前方倒立回転跳びをもっと練習したい、他の難しそうな技もやってみたいけど、演技でやる技を優先して練習したい。」などの記述も見られた。自己の課題発見・解決ができていた授業となっていたが、発表会(第6時)が近づくにつれ、発表会のための課題解決へと変容した。

5. 本実践の課題

課題としては、大きく分けて2つある。

① 課題解決学習と発表会の関係

本実践の単元は当初、課題解決学習として計画した。しかし、単元末の発表会が生徒にとって評定化されるテストのように受け止められた。

当初の課題解決学習は生徒が自ら課題を発見・解決できるようにするため、自己に適した技で発表を行うこととした。基本的な技は小学校第5学年及び第6学年で学習される技を含んでいることを理由に、第1時を除いて、教師による細かい技能ポイントの解説などを行わずに実施した。

そのため、生徒は自分がやりたい技や挑戦したい技に自由に取り組んでいた。取り組む時間・場所・回数も自由であり、試行錯誤する活動ができた。

その後、単元終盤の発表会が行われることが生徒に強く意識された。この発表会とは、生徒が3から5種類の技で構成する演技を考え、教師の前でビデオ撮影されながら発表するものである。

このとき、教師が生徒の技能を評価し記録する。これが評定化されるテストのように生徒に捉えられ、結果として失敗しないように元々できる技で構成することを助長した。

このような結果として、課題解決学習や技能向上が抑制された可能性が考えられる。

② 2観点による運動の認識

一般的に体育において「できる・できない」の2観点で語られることが多い。マット運動においても、同様の考え方がある³⁾。

本研究では、これを問題と捉え多観点で動きの変容に着目した。

しかし、結果的に生徒の観点は2観点であった。これは、生徒にも動きの変容に着目する観点が必要である。そのために、動きの変容に着目するような指導または学習プリントの提供が望まれる。

6. 謝辞

本研究にあたり、教師力向上実習をお受けいただいた連携協力校の校長先生をはじめ、教務主任の先生、保健体育科の先生方などの弥富市立A中学校職員の皆様には、研修にご理解、協力をいただき大変感謝しております。

また、教師力向上実習・研究を進めるにあたり、温かくご指導していただいた森勇示先生、教師力向上実習を円滑に行えるように、実習校との連絡や礼儀等のご指導をいただいた真山恵先生に厚くお礼申し上げます。

教職大学院での学びを活かし、今後務める教育現場にて、還元することができるよう、に今後も修養に努めてまいります。

7. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説保健体育編, 東山書房, p24
- 2) 文部科学省, 「現状と課題」, (2022年12月4日取得, <https://www.mext.go.jp/>)
- 3) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社, pp28-29
- 4) 岡出美則・友添秀則・岩田靖 (2021) 体育科教育学入門[三訂版]. 大修館書店, pp. 52-53.
- 5) 文部科学省: 学校体育実技指導資料第10集「器械運動指導の手引」, (2023年1月6日取得, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/01/27/1356131_4.pdf)
- 6) 広島県立教育センター, 保健体育科学習指導案, (2023年2月1日取得, <https://www.hiroshima-c.ed.jp/web/an/j/tai/tai-j-2301.pdf>)
- 7) 島根県教育センター, 保健体育科学習指導案, (2023年2月1日取得, https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/kikan/matsue_ec)
- 8) 福岡県教育センター, 保健体育科学習指導案, (2023年2月1日取得, http://www.educ.pref.fukuoka.jp/bunsho/pub/List.aspx?c_id=14&Lbunrui_ck=3&bunya_ck=14)
- 9) 鹿児島県総合教育センター, 保健体育科学習指導案, (2023年2月1日取得, <http://www.edu.pref.kagoshima.jp/research/cooperation/sidouan/yoshidaminami/h28/pdf/hokentaiiku.pdf>)
- 10) 千葉県総合教育センター, 保健体育科学習指導案, (2023年2月1日取得, https://ap.ice.or.jp/_wakaba2013/index.php)
- 11) 茨城県教育研修センター, 保健体育科学習指導案, (2023年2月1日取得, <https://www.center.ibk.ed.jp/wysiwyg/file/download/1/2124>)
- 12) 上謁書1), p64
- 13) 上謁書1), p63
- 14) 上謁書1), p65
- 15) 上謁書3), p80
- 16) 西沢宏 (1993) 小学校体育科・基礎的技能をつける5 マット運動, 明治図書
- 17) 金子明友 (1982) 教師のための器械運動指導法シリーズ 2, マット運動, 大修館書店
- 18) 木下英俊 (2012) マット運動における倒立前転の技の構造と習得に関する発生運動学的一考察
- 19) 森勇示 (2021) 愛知教育大学大学院講義資料「器械運動は何をするのか (マット運動)」
- 20) 上謁書3), p81

(指導教員 森勇示)